

回文の
たまたま

ま たまたか
 だいのし
 としのい
 たまたま

ま

first message from ISOS



Minami

ま

またまた課題の試図 凌いだか たまたま

「はじめに規格ありき」。トップの決定で、ISO規格が会社に導入された。その後、どうやってこの規格を使うかを考えた。課題の試図をいろいろ実行して凌いだ。たまたま、何とかうまくいっている。これでいいのだろうか。まったく逆のアプローチもある。

やりたいことはたくさんあった。学生がわざわざ大学に来なくても自宅のパソコンで学校での事務手続きができないか。遠隔地に住む学生へのe-ラーニングができないか。学外の人とインターネットを使ってもっとオープンに交流できる場がつかれないか。大学がITを使ってできる業務は大きな可能性を持っていたが、それを積極的に推進するためにはどうしても乗り越えなければならない壁があった。情報セキュリティである。ネットワークに対する外からの攻撃を防御し、内部で情報資産に対する襲撃を徹底する仕組みをきちんと構築しないことには、IT事業は前に進まない。そのためには、どうすればよいのか。南山大学のISMS推進の事務局をつとめた大宮則彦さんは、そんな時にBS7799に出会い、「これだ」と思った。

自動車工場の設計から設備導入、試運転、受け渡しまでのプロジェクトマネージャーを海外で担当していた時代、自分の頭では解決できないマネジメント上の問題がいくつもあった。くやしい思いを長年続けてきたが、数年前にISO9000の規格と出会い、「なんだ、あの時、こうすればよかったのだ」と気づく。そんな経験がベースになっているBVQI審査員の景井和彦さんは、ISO9000やTS16949の審査を通じて、今度は受審組織に「なんだ、こうすればいいのか」と気づかせる役割を担っている。

前進させたい事業があるのに、その推進の後ろ髪をつかむ何物かがある。そのお陰で失敗したり、損害を被ったり、事業が停滞したりしてしまう。何とかその何物かの正体を見極め、退治できないか。そういう思いがあってこそ、BS7799やISO9000といったマネジメントシステム規格は、ツールとして生きてくるのではないか。「はじめに思いありき」。